

平成21年度横浜市次世代育成支援行動計画 第2分科会（第2回）会議録	
日 時	平成21年8月17日（月）14:00～16:30
開催場所	横浜情報文化センター 7階 大会議室
出席者	岩倉委員（副座長）、岩永委員、岩室委員、小山委員、高橋委員（座長）、伊達委員、辻委員、橋本委員、八木下委員、関山委員、柳井委員
欠席者	岩本委員、田中委員、土山委員、安田委員
開催形態	公開（傍聴者 0人）
議 題	1. 子ども・青少年の健全育成 ア 岩室紳也委員からの発表 イ 意見交換 2. 事務局からの報告（子ども・若者育成支援推進法について） 3. 次回の協議事項の確認
決定事項等	特になし
議事 1. 子ども・青少年の健全育成 ア 岩室紳也委員からの発表 ○大人は、「青少年には、親の世代に考えられないことが起きている」という事実があることを認識することから始めるべき。 ○現代社会の一番の課題は「関係性の喪失」。最優先の目標は「関係性の再構築」におく。そのために急がれるのは「コミュニケーション能力の再開発」 ○健康づくりの現場では、I（情報）E（教育）C（コミュニケーション）が健康づくりの基本になると言われている。人づくりでも同じことだと考えるが、C（コミュニケーション）が不足している。正確な情報や知識がどんなに増えても、「コミュニケーション」がなければ、「生きる力」は育めない。 ○「コミュニケーション」のコツは、「自分ごと」として相手に共感すること、相手にとって心に響く経験になること。 ○心・性・薬物などの問題は1つの表現形であって、根底には「関係性の喪失」の問題がある。 ○今、「関係性喪失期」から「関係性障害期」に移行している。 ○社会に蔓延する問題に本質的に対処していくためには、高いリスクを持つ個人を抽出する「ハイリスク・アプローチ」だけでなく、対象を一部に限定しない社会全体に蔓延している「リスク」自体への「ポピュレーション・アプローチ」を意識することが重要である。 ○「ポピュレーション・アプローチ」として、「関係性の喪失」というリスクに視点を置いて取り組むことが必要である。 イ 意見交換 （関山委員）キャンプなどの自然体験活動の中で、子どもたちは日数を重ねるとコミュニケーションを取っていくようになる。子どもたちに外に出て行くチャンスを与えてあげることが繰り返すことで子どもたちの	

心の地盤を作ることが大切。

(岩室委員) 子どもや青少年に向けたさまざまな理論を持った取り組みがあるが、「関係性の再構築」という根底の部分は共通しているのではないかと。自治会でのあいさつ運動や防犯運動のような既存の取り組みも含めて、「関係性の再構築」という共通のテーマで意識付けることが、子ども・青少年の体験の場を広げていくことにつながるのではないかと。

(岩永委員) 20～30代の若者に対する就労支援の場での「ソーシャル・スキル・トレーニング」のプログラムを行っているときに、人のやり方を見てこういうやり方があるんだと外に開いている方はコミュニケーションのバリエーションをどんどん広げていくが、コミュニケーションにルールがあるのではないかと考えて自分だけのやり方にとどまってしまう方は、なかなか外に広がっていかない。

(岩室委員) 大人として完成した段階ではスキルを身につけるのは難しい。子どもの外来で、子ども本人があいさつするまで診察を始めないということをやっている。母子のときからコミュニケーショントレーニングが大切である。

(辻委員) コミュニケーションに、「その人でなければいけない」、「代替可能性がない」ということが少なくなっている。相手自身を見るということは、相手に認められるか否かという他者との関係性に繋がる話。それがないと本当にコミュニケーションが取れているとは言えない。

(岩室委員) 「代替可能性が無い」という事象のモデルを、大人が自らの体験として子どもたちに伝えていないことが問題。

(柳井委員) 岩室委員の話は、子どもや青少年の課題だけではなく、「モンスター・ペアレント」のように大人の課題でもあると感じる。

(伊達委員) 「ハイリスク・アプローチ」では、「ハイリスク」を選別して目前から消してしまう雰囲気の中で、多くの人にとっては「ごく一部の気の毒な人の問題」となってしまう。また、自分が「ハイリスク」の集団に入らないようにと震え上がってしまう。すべての人が自ら負っているはずのリスクに対して、自分の心も傷つくがみんなと一緒に進んでいくという社会にしていきたい。

(岩室委員) 「ハイリスク」の人を選別してその人に向けた施策を行うと、いかにも対策をやっているような感覚になってしまう面がある。例えば「メタボ検診」で、「ハイリスク」の人を選別して指導をしても、ハイリスク予備軍は変わらないし、何よりメタボになる問題のベースに存在するリスクに対しては手付かずのままになっている。

(高橋座長) 問題がある青少年だけでなく、その周辺の捉え方は重要。例えば、不登校を少なくしていくには、不登校になっているという「ハイリスク」の人だけではなく、予備軍の人や潜在している問題に目を向けなければならない。また、学校の先生だけの対処ではなく、地域、家庭など、いろいろな関係性の水脈が干からびているということにも目を向ける必要がある。

(橋本委員) 子育て支援の現場で、赤ちゃんとの接し方がわからない大人が多いと感じている。親の思い通りに操作しようとする大人が多く、子どもはいつも管理されている。結果として、感情を表現できない子どもが増えている。人に何か伝えようと思うものを持っていないと、コミュニケーションは発生しない。子育てに一人で奮闘している母親たちも、共感してくれる人がいると気持ちが和らぎ、コミュニケーションが成り立っていく。共感できる人が身近に生まれるような地域をもう一度作っていかれたらよいと思う。

(高橋座長) 学力という概念が、個人単位で評価されている。人と一緒に何かをやるとか、心を開いて他者を受け入れるということが概念に入らない。勉強すればするほどますます袋小路に入ってしまうという構造がある。

(八木下委員) 自分の若い頃と時代が変化しており、理解できない部分があると感じる。

(岩室委員) 他者との違いなどいろいろあってもよいということを、大人が姿として見せていくことが大切。学業成績最優先という世の中の発想を変えると、社会が変わるのではないかな。

(小山委員) 「関係性の喪失」について、大人のモデルがないという点に共感する。自分の感情をうまく表現できない子どももいて、極端な例だが、小学校に入学してきたばかりのときに「刺すぞ」「殺す」「死ね」の3つしかボキャブラリーが無い子もいた。身近な大人のモデルの重要性を実感した。地域・家庭・学校で様々なパターンを子どもにも親にも見せる大切さを感じる。コミュニケーションの大切さを大人にも知らせていく必要性を感じる。

(高倉副座長) 社会全体のリスクを減らしていくための役割を担う、コーディネーターや、家族・学校の先生・NPOなどサポーターを支援していく必要があるのではないかな。

(岩室委員) 担い手どうしが「繋がる」ということに大きなハードルがある。「ポピュレーション・アプローチ」の視点で、繋がることの大切さを普及・啓発することが必要。また、それらをどう繋いでいくのかというときに、行政の役割は重要。行政のすべての部署が「ポピュレーション・アプローチ」の意識を持つことによって、次世代育成に取り組んでいく姿を示せれば世の中が変わりうるのではないかな。

(高橋座長) 「関係性の喪失」の原因は、社会全体が無駄を省き生産性を高めるという近代的合理化の方向に進む中で、「ゆとり」「すきま」がなくなり「居場所」性が失われてきたこと。学校教育も、教育性や教師の援助性など発達することを強調すればするほど機能性が高まる。不登校の増加も、子どもも「失敗してはいけない」「無駄なことをしてはいけない」と感じ取っていることが背景にあるのではないかな。

(関山委員) 自然は人間にとって重要なものであり、自然の中に身をおき、その中から子どもたちが自ら学び取る活動の重要性を知ってほしい。

(岩室委員) 子どもや青少年に向けたさまざまな素晴らしい活動が行われているが、「自然体験」や「性教育」といった個別のテーマに取り組む活動として捉えられてしまうと活動の広がり生まれにくい。そうした取組みを、「人づくり」という共通の視点で捉えて、行政が「お墨付き」を与えられるような次世代育成計画にしてほしい。

(高橋座長) 「できるできない」という能力とは関係のない、生きていることに価値があるという「存在承認」が重要。現在の社会には何もできないやつは生きるなという無言の圧力がある。しかし、生きていれば、人に迷惑をかけるのは当たり前。人は人との関係の中で生きているということを分科会での共通理解としたい。

(岩室委員) 性の問題は、認めてくれる人がいないという欠乏欲求を満たすために起きている。存在承認が不十分なことの表れ。

(高橋座長) 分科会での提案方向についての意見はないか？

(事務局) 当事者の気持ちをしっかりと受け止めて、事業・政策にしていくことこそが行政の役割。また、市民と行政が協働して、時代に合った新しい関係を再構築していく必要がある。

(伊達委員) 社会的養護そのものは形式上「ハイリスク・アプローチ」にならざるを得ない側面があるが、「ポピュレーション・アプローチ」との重層性をどう考えるかが課題。専門部会とどう重ねていくか。

(高橋座長) 「ポピュレーション・アプローチ」の必要性は、第2分科会の全体での共通理解としたい。社会病理というアプローチが必要である。

(岩室委員) 子どもや青少年の「たまり場」は、実はいっぱいあるのかもしれない。隣近所もそのひとつであろう。既存のものをきちんとしたものに育て上げるという意識が必要である。個人の抱えるリスクを対象

にアプローチするのではなく、「関係性の喪失」という社会全体のリスクに対するアプローチが必要。

2. 事務局から報告（子ども・若者育成支援推進法について）

○事務局から「子ども・若者育成支援推進法について」の説明

（意見・感想等）

（岩室委員）国の政策には、「ハイリスク・アプローチ」の発想がまだまだ強いと感じる。横浜市の計画では、「ポピュレーション・アプローチ」の視点でも検討していくべき。

（岩倉副座長）飛鳥田市政以降、市では多くの青少年施策を実施してきたが、相対的に検証・評価したうえで、今回の計画の中で何をやるか、何を資源としていくかを突き詰めた議論をしたい。

3. 次回の協議事項の確認

（事務局）第3回分科会は、9月3日 14時から、横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）201号会議室で開催する。テーマは、子ども・青少年育成施策のあり方についてである。

以上

資料	資料1 第2分科会の今後の議題について 資料2 岩室紳也委員からの発表 関連資料 資料3 子ども・若者育成支援推進法 関連資料
----	---